

碑文中その教旨について頻りに玄樞・玄綱・玄理等の文字を用ゐ、またその僧侶の中に玄德・玄眞・玄覽等の名を用ゐたものもあつたこと、景教といふ名を付したについての重要な一段「眞常之道妙而難名、功用昭章、強稱景教」の如きも、道德經第三十二章の「道常無名」とか、或は第二十五章の「有物混成、先天地而生、……吾不知其名、字之曰道、強爲之名曰大」の體に模した如きを始め、從來既に知られて居る通り、劈頭から終りに至るまで、道德經中の語、若しくはその意を採つた所の甚だ多いことなども諒解し得られると思ふ。景教士が教義の宣傳に當つて敢て執るに至つた態度をかく見定めた上、更めて志玄安樂經について考を進めなければならぬ。

さて此の經の内容が道德經の所説に甚だ近く、また經題中の志玄といふ語も、道德經に由縁を有するものであらうとの考は前に述べた所であるが、景教碑文や景教士の態度について、こゝに論じた所が幸に當を失せぬならば、かゝる考は當然承認せらるべきで、従つてまたかゝる題名と内容とを有する漢文の景教經典の存したことは、少しも奇怪とするに及ばず、太宗が景教に對して、「詳其教旨、玄妙無爲」と詔したのが、如何にも道理であると首肯せられる次第である。併しながらかゝる見解の下に此の志玄安樂經に對するならば、此の經は當時の景教士等が、特に道德經の所説に近からしめて、ネストル派の基督教義を説いたもの、即その教義の宣傳の爲に、彼等が唐に於て選述したものと見なければならぬのであつて、前記經目の末の跋に、これを以て景淨が譯出した三十部中の一に數へて居ることゝ矛盾撞着することとなる。此の場合に於て譯とあるに重きを置いて、此の志玄安樂經その儘の原典の存在したことを認定するか、或は如上の見解を持して、譯得云々の跋文を信賴するに足らぬものと見るかにつ